

# カトリック六甲教会 教会報

2011  
7  
No.475

## 六甲教会の思い出

赤松 広政 神父

今は司祭として六甲教会でお手伝いをさせていただいています。どうして大勢の人が教会に来てくださるのか不思議に思うことがあります。教会に人が来なくなると、司祭は大変困るのですが、幸い六甲教会には日曜日に大勢の人が来てくださいます。ミサの中で人々に感動してもらえるような説教を司祭がするわけでもなく（たまにはあるかもしれませんが）、それでも大勢の人が教会に集まってきます。なぜでしょうか。また教会の中での司祭の役割は何でしょうか。そのようなことを考えながら、わたしと六甲教会とのかかわりを振り返って見ようを思います。

私の父は神戸大学(当時の神戸商大)で経済学を五百旗頭先生から学びました。そのご子息は現在、震災復興構想会議議長です。五百旗頭先生はとても敬虔なカトリック信者で、その影響で父はカトリックの洗礼を受けました。大学を卒業後、父は徴兵を受けて軍隊に入り教会からは離れてしまいました。

その後私の二人の妹が、できたばかりの小百合児童館の幼稚園に入園することになって、わたしたちの家族はカトリック教会との関わりができました。父はすっかり無神論者となり、イエス・キリストの奇跡物語には反感を覚えていたようでした。しかしわたしが土曜学校へ行ったり、妹たちがカトリックの教育を受けたりすることには反対しませんでした。

わたしが小学校4年生の確か冬だったように思います。裏の銭湯が失火して自宅が全焼してしまいました。その日から一家がばらばらで知人の家のお世話になるという生活が続きました。わたしと二人の妹は深刻な思いを持つことはありませんでしたが、両親は悲嘆にくれていたようです。その時、妹たちが通っていた海星小学校と六甲教会の皆さんに大変よくしていただきました。慰めの言葉、授業料の免除や衣服・食料の提供など思いもよらないような親切を受け、両親はカトリック教会と六甲教会に大変よい印象を持ちました。このことがきっかけとなり、母と二人の妹は当時の主任司祭ブラウン神父様から洗礼を受けました。

教会は使徒の時代から相互扶助や困窮者の援助を行っています。「信者たちは皆一つになって、すべての物を共有にし、財産や持ち物を売り、おのおのの必要に応じて、皆がそれを分け合った」(使徒2章44節)という記述はかなり理想化されているといわれていますが、差別扱いや経済的格差が教会の一致の妨げになることはよく認識していたでしょう。パウロは宣教地において、常にエルサレムの貧しい人のことを心に留め、献金を集めてエルサレムに持ち帰ったようです(ロマ15章25節、2コリント8章9節)。また寡婦に対する特別の配慮がなされていたこともうかがえます(使徒6章1節)。

イエス・キリストは最後の晩餐の席で弟子たちが互いに愛し合うように切に願っていますし、キリスト者が互いに分かち合い、助け合って生きる姿はこの世に対して大きな証になったことと思います。神は永遠にいつも私たちに呼びかけておられることでしょう。神に感謝!



## 【イエス・その2】

イエスは、その教えと行いによって「神のことば」を告げ、人々の応答を求めた。イエスの教えは、天の父の無条件な愛と隣人愛の実践という二つの焦点を持ち、彼の行動は貧しい人々との連帯と様々な実力者たちとの対立という二つの側面を持っていた。

**(1) 神を父とする信仰の歴史：**

イエスは神を父と呼び、私たちにも神を父と呼ぶように命じた。神を父と呼ぶ発想は、当時、他の宗教にもあったし、ユダヤ教にもある。しかし、ユダヤ人は他の宗教のように自然的な感覚から神を父のようなものという類比的な意味でそう呼ぶのではない。選ばれた特別な民として神を父と考えるのである。

**① 旧約聖書の背景**

- ・ 出エジプト記；「ファラオに言うがよい。『イスラエルは私の子、私の長子である。私の子を去らせて、私に仕えさせよ』と・・・」（出エ 4:22-23）。
- ・ エレミア書；「私は彼らを慰めながら導き流れに沿って行かせる。・・・私はイスラエルの父となり、エフライムは私の長子となる」（エレ 31:9）。
- ・ イザヤ書；「アブラハムが私たちを見知らず、イスラエルが私たちを認めなくても、主よ、あなたは私たちの父です」（イザヤ 63:16）。
- ・ サムエル下；「この者が私の名のために家を建て、私は彼の王国の玉座をとこしえに堅く据える。私は彼の父となり、彼は私の子となる」（サム下 7:14）。
- ・ 詩編；「お前は私の子。今日、私はお前を生んだ」（詩編 2:7）。

**[神との密接な関係をあらわすもの]**

シラの書；「孤児に対しては父親のようになり、孤児たちの母親に対しては、その夫がするように手助けするがよい。そうすれば、いと高き方はお前を子と見なし、母親以上にお前を愛してくださる」（シラ書 4:10）。

知恵の書；「神が自分の父であると豪語する。それなら、彼の言葉が真実であるかどうか見てやろう。生涯の終わりに何が起こるかを確かめよう。本当に彼が神の子なら、助けてもらえるはずだ」（知恵 2:15-16）。

**② イエスと神との関係**

先ず、イエスが持っていた神との独自の関係が、周囲の人間たちにも及んだ。イエスは決して神を「私たちの父」とは呼ばない。イエスと父との親しさを示すもう一つの例は、イエスが神を“アッパ”と呼んでいたことである。ユダヤ教を含めて神を父と呼ぶ宗教は他にもあったが、神を“アッパ”と親しく呼ぶ宗教は他に例がない。

**③ 新約聖書に見る“アッパ”の三つの伝承**

マルコ；「アッパ父よ。あなたは何でもお出来になります。どうかこの杯を私から取りのけてください」（マルコ 14:36）。

マタイ&ルカ；「父よ、これは誠にみ心に適ったことでした」。

パウロ；あなたがたは人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。この霊によって私たちは、「アッパ、父よ」と叫ぶのです（ロマ 8:15）。

あなたがたは子であることは、神が「アッパ父よ」と叫ぶおん子の霊を、私たちの心に送って下さった事実からわかります（ガラ 4:6）。

ギリシャ語の聖書の中に、この親しい呼びかけ「アッパ」が、そのままヘブライ語で記されているのは、イエスの非常にユニークな祈りの言葉が、弟子たちの心に強い印象として残ったからである。この言葉は、イエス自身の言葉として確かめられる数少ない言葉である。「私の父」「あなた方の父」という区別的な用法は、イエスが他の人間とは異なる特別に緊密な神との関

係を意識していたことを物語っている。

イエスにとって神とは、幼児が何の疑いも抱かず父親にすぎるように、絶対的な信頼に値する方であり、求めてない先から私たちに必要なものを知っており、最も良いものを与えてくれるのである（マタイ 6:6-8）。

## （2）慈しみと赦しに満ちた「父なる神」についての教え

ぶどう畑の親切な雇い主（マタイ 20:1-15）を始め、放蕩息子の譬え、失われた羊の譬え、失われた銀貨の譬えなどで描き出された父の姿は、慈しみと憐れみに満ちた父のイメージである。寛大な雇い主の譬えは、能率が上がらない人、徳を積んでいない人にも、神はその日必要なものを恵まれる。放蕩息子の譬えは、父の無限の愛を示している。これは父である神の属性というより、神が取ろうとしている姿勢、父の意志である。

## （3）「神の国の義」に関する教えとその特徴

神の姿勢が明らかにされると、つぎにイエスは、私たちがどのように行動すべきかを教える。

私たちは神から赦され愛されたことを体験したら、今度は同様に振る舞うことが要求される。神が取ろうとする赦しと愛の姿勢に一致することを私たちに求める神の国の義である。

マタイ 18:21-35 の“負債の赦しの譬え”は、神の国のこうした二重性を物語っている。

## （4）実践の重要性について

神の赦しと愛を受けたものは、隣人に対して同様に実践することが要求されている。それを物語る譬えが、良きサマリア人である（ルカ 10:30-37）。似ていない兄弟の譬えでは、言葉よりも実践を示したものが賞賛されている（マタイ 21:28-32）。

## （5）当時の社会事情と「罪人」の理解

イエスはユダヤ社会によって罪人とされた人々と罪人を区別している。イエスにとって人間は皆、罪人である。しかしイエスは、罪人を裁くために来たのではない。罪人を招くために来たのである。力ある業が病む者・弱者への特別の関心を示しているなら、食卓の交わりは罪人と呼ばれる人々への特別の配慮、連帯感を示している。大きな罪を赦された女の話（ルカ 7:36-50）では、愛と信仰が罪の赦しに結びついている。信仰が罪の赦しをもたらし、それが愛の行為を生むという。罪の赦しと愛の行為は、その大きさが比例していると言える。信仰を通して救われた事実と愛の生き方が不可分に結合している。ユダヤ人にとって罪人は、義とされる前提条件を欠いた問題外の人間である。イエスはこうした人々に自ら接近し、救いの可能性を示した。この行為自体、罪人にとってもユダヤ人のとっても驚嘆に値することであった。それどころかイエスによれば、罪人は先に神の国にはいるとさえ言明している。イエスは明確な目標設定をしている。「私が来たのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである」（マルコ 2:17）。この目標は、天の父の意向から出ている。「罪人が一人でも悔い改めるならば、……大いなる喜びが天にある」・罪人の招きが単に教えとして述べられたのではない。イエスは実際にこうした人々と食事を共にした。

## （6）律法論争に見る「神のことば」

律法の枠組みを超えるように見えるイエスの姿と、社会体制を保持しようとした人々との間に大きな軋轢が起こった。イエスの批判の主要点は以下の通りである。律法主義は人に対する愛と神に対する愛に欠けている。神に対する愛と義は、律法の中核のはずである。イエスの批判は律法そのものと言うより、教えと実践の分裂に向けられているのであろう。イエスの主張は、律法の廃止ではなく、律法の最奥にあるものの純化であり、その意味でイエスの主張は、律法の先鋭化であるとさえ言える。

## （7）「神殿を清める」出来事の意味（マルコ 11:15-19）

大切なのは教えではなく、実践であるというイエスの根本姿勢が、ここに表現されている。イエスにとって安息日や神殿は、神の慈しみの現れの間、神とのつながりの場のはずである。それなのに実情は、そうでなくなっている。イエスは神殿そのものではなく、神殿の実体を批判する。イエスの論争

は、律法自体ではなく、その実践を批判している。そして、この場面でイエスは実践を持って神殿を清めた。

#### (8) イエスの経済・社会批判

「支配者と呼ばれる者は、諸国民のうえに権力を振るっている。だがそうであってはならない。大いなる者になろうとする人は、仕える者となり、第一人者になろうと思う者は、万民の奴隷になれ」(マルコ 10:42-45)。イエスは社会的な批判をあまりしていない。イエスの関心の対象は、社会全体というより人間一人ひとりであるようだ。

(主任司祭 松村 信也)

### **\*\* 主を畏れることは 知恵の初め \*\***

6月6日、「聖書通読」の巡礼者たちは、元気で新約の地へ到着しました。神の言葉に導かれて、長い旧約の巡礼地をひたすら歩き続け、新約の地へ渡る「知恵文学」(箴言、ヨブ記、コヘレトの言葉、シラ書、知恵の書、詩篇)という橋の上に差し掛かりました。私たちは、振り返って今まで歩いてきた長い旧約の旅路を一望することが出来ました。この時、私たちの心に、旧約の知恵者たちが、罪と赦しのイスラエルの歴史を振り返って告白した「主を畏れることは知恵の初め」という悟りの言葉が伝わってきました。

ちょうどこの時、大地を揺るがす巨大地震が突然、日本を襲いました。テレビでこの映像を見た瞬間、私は、名状しがたい畏れに、心と体が震えました。存在の基である大地が揺らぎ、一瞬のうちに大津波が人も大地も飲みこんでしまう光景を前に強い畏れに包まれました。更に底知れぬ原発の恐怖。それは、9：11とは次元の違う霊的な衝撃でした。これこそ、神への畏れでした。

<神は誰で、いったい人間は何者か>

この問いが私の中で繰り返されました。人間は何を畏れていたのでしょうか。人間のエゴが作り上げた偶像を畏れていたのではないか。科学の力(核、生命)、支配の力(富、権力)。世界は、人間の作りだしたこれらの偶像を、より多く、より早く持つことで、平和が得られると、錯覚していたことが思い知らされました。3：11の出来事は、どうにもならなくなった人間の世界の再創造を、神から迫られているように思いました。

“死んではいけない、死と滅びへの道ではなく、生きる命への道を選び直しなさい!”

という神の言葉がよみがえってきました。それは、旧約の旅路で繰り返し聞いたみ言葉でした。

私たちは、内なる声に促されるままに、橋の途上で立ち止まり、共に1時間祈りのひとときを過ごしました。これまでの長い旅路をずっと私たちと共にいてくださった神は、今、この時、私たちに何を語り、どんな問いかけをなさっているかを、一人一人が沈黙の祈りの中で聴きました。再び、私たちは立ちあがり、「知恵文学」の橋を、新しい新約の地を目指して又歩き始めました。道すがら、仲間たちと共に、詩篇を歌いながら。

6月6日、私たちは、新しい新約の地に到着しました。今までと違う景色が目の前に広がっていました。新しい地の入り口に、神の御子が立っていらっしゃいました。私たちの心は、高まりました。神の御子は、これから、どんな知恵の言葉を語ってくださるのでしょうか。

“主よ、語ってください。 私は聴きます。 私たちは聴きます。”

(Sr. 出口 洋子)

## 「平成22年度小教区評議会年次報告会」議事録

☆ 日 時：2011年6月12日（日） 11：15～12：10

☆ 場 所：主聖堂

☆ 参加者：約50名

・ 司 会：河野 評議会副議長、 ・ 書 記：木藤 （広報部）

### 1、 松村 信也主任司祭 挨拶

- ・ 今月で六甲教会主任司祭に着任して2年になり、今日までの皆さまのお祈り・ご協力に感謝します。
- ・ 新地区体制が4月から順調にスタート。ご尽力頂いた皆様に感謝します。
- ・ 本年度のカトリック神戸地区大会テーマ「つながり」「交わり」「分かち合い」を軸に、まずは私たちができることを一步一步実践に移し、よりよい明日の日本の教会のためにも、日常の積み重ねを大切にしていきたい。

### 2、 議 題

#### (1) 平成22年度報告・平成23年度課題（蛭田 評議会議長）

- ① 平成23年度小教区評議会新役員・評議員一人一人を紹介。
- ② 平成22年度の信徒動静は、転入25名・転出47名・帰天24名で、年間計46名減少。
- ③ 平成22年度の主な出来事は、
  - ・ 2010年6月 日本基督教団東梅田教会より辻パイプオルガンの導入
  - ・ 2011年3月 信徒会館リフォーム完成。
  - ・ 「東日本大震災」の義援金・支援金募集活動を実施。
  - ・ 2011年4月に地区会再編成する為に、数回に亘る地区世話人会を実施し、検討した。
- ④ 平成23年度の主な課題として、次の2点に重点を置きたい。
  - 地区会を通じて信徒の交わりを深めよう！
  - 専門部会活性化による信徒への働きかけを強め、また地区会をベースにした信徒会を築こう！

#### (2) 平成22年度教会会計報告（藤原 泰 教会財務担当）

前年度と比較しながら各項目について説明。

#### (3) 小教区評議会財務報告（蛭田 評議会議長）

- ・ 平成22年度予算支出実績・平成23年度予算を各信徒会・専門部会ごとに説明。

#### (4) 地区会報告

- ① 新地区会の役割・構成等の説明（橋岡 コーディネーター）
- ② 各地区・ブロックの現状報告（所属世帯数・人数等）と今後の抱負（各地区長・ブロック長）

### 3、 質疑応答

特になし

節電のお願い

今年の夏は電気量の不足が考えられます。無駄な電気は消しましょう！！  
特に使っていない部屋の電気の消灯やクーラーの冷え過ぎに注意しましょう！！  
1人ひとりの自覚が節電につながります。

## 神戸地区大会を終えて

神戸地区大会実行委員長 川合

カトリック神戸地区大会が6月5日（日）、神戸海星女子学院講堂で開催されました。神戸地区11小教区が、“共同体を育て、耕そう”、“つながり・まじわり・わかちあい”をテーマに集いました。神戸地区大会は2年に1回開催されます。前は三田篠山での大会でした。今回大会は東ブロックの担当で私が大会実行委員長を務めさせて頂きました。

一年前に大会実行委員会を編成し、各小教区から実行委員を派遣頂き総勢25名で企画、準備して参りました。

大会当日は雨の恐れもありヤキモキしましたが、天気は何とか大丈夫でした。どれほどの皆さんが集まって頂けるか心配で不安でしたが、会場が溢れるほどに700名近い“兄弟・姉妹”が集まって下さいました。池長大司教をお迎えし11小教区の司祭団による共同司式のミサが執り行われました。大司教の説教では、共同体として大事なものは組織としての共同体そのものではなく、共同体を構成する私たち一人ひとりが“復活して息づいておられるイエス様に倣って生きること”が大切であると諭されました。共同祈願は4ブロックの日本語、ベトナム語、スペイン語、英語の7つお祈りをしました。異口同音に、国や地区や小教区に捉われず、みんなが“つながり”を大切にし“明るくそして前向きな共同体、福音宣教する共同体”を作っていこうと願い、そして約束し、参加者全員感動しました。イベントは、映像による各小教区の紹介でした。これは初めての試みと思います。“映像による教会の紹介は温かさが伝わりよく分かった”との感想が寄せられ、スタッフ一同喜びました。

私たち六甲教会は、この4月から“新しい地区会”を発足スタートさせました。お互いに“つながり”を大切にして、私たち一人ひとりが同じ方向性をもってイエス様と共に歩んで参りましょう。そして、神戸地区大会のためにご協力頂きました六甲教会の多くの皆さまに厚くお礼申し上げます。有難うございました。



六甲教会からはコーラスを披露。

## 「東ブロック合同堅信式」に与って

台風2号の影響を受け、折からの荒れ模様の中、5月29日（日）11時15分より神戸中央教会にて、2年ぶり「東ブロック3教会合同堅信式」が行われました。

英語グループ13人、神戸中央教会中高生12人、成人3人、住吉教会中高生7人、六甲教会中高生4人、成人4人、急遽参加の西ブロックより1人の受堅者と各々の代父母合わせて88人の期待と喜びにあふれた晴れやかな表情が、祭壇を取り囲み、内陣がいっぱいに満たされました。

池長大司教様司式の下、赤波江、松村、片柳、シリロ、オマリー、コンスタンス神父様方と西ブロックの松浦神父様の共同司式により、日本語と英語のバイリンガルミサとして、手話通訳も入り、進められました。ミサ中、「十二使徒に与えられた聖霊の息吹きが、この堅信で私たちにも与えられるのだから、今日受ける人たちもこれまでに受けた人たちも共に誇りと自信を持って、信仰を証ししていかなくてはならない」と説かれました。私自身、半世紀程前に堅信の秘蹟に与った時の感激を思いながら、ミサに



与りました。

按手と塗油をもって秘蹟が授けられた後、神戸中央より受堅者代表、住吉より代父母が代表して、“喜びと感謝”を、六甲より共同体の決意を、英語グループより感謝の思いを、先唱者により「東日本震災被災者の為」の共同祈願が捧げられました。聖体拝領時には、英語グループにより

I say "Yes", my Lord, in all the good times, through all the bad times.

I say "Yes", my Lord, to every word you speak.

と、受堅の決意を語るにふさわしい歌が歌われ、厳かな中にも喜びに満ちた堅信式のミサは終了しました。

ミサ後、席を移し、大司教様も共にささやかな、けれども心のこもったお祝いの会がもたれ、集会室は喜びの表情で一杯になりました。

私自身、今回、末席を汚していただけではありますが、式の打ち合わせの最初から関わらせていただく事により、多くの手によって典礼は勿論のこと、過去の堅信式を参考に、行き届いた細やかな準備の数々が為されている事を目の当たりにし、当日ミサに与っていただけでは分からなかった心配りを見せていただく事が出来、改めて“全てのことに感謝”の思いで一杯になりました。

皆様も機会があれば、上記の歌詞のように、全てに“ Yes”、My Lord. と積極的にお手伝いに携わってみて下さい。素晴らしい恵みの時がいただけると思います。 志水



## 諏訪司教の叙階式に参列して！！

梅雨の時期、6月19日、三位一体の主日は、雨もあがり爽やかな日でした。

松村主任司祭以下信徒25名はマイクロバスで、15名は自家用車で、高松の司教座聖堂、桜町教会へ出向き、そこで諏訪榮治郎司教の叙階式に参列することが出来ました。300人程収容の美しい教会ですが、1,000人程は聖堂外で4か所に分かれ、モニター画面での参列でした。

池長大司教の司式のもとに、19人の司教団、高松教区、大阪教区等50人の司祭団参列の中、駐日教皇大使である、アルベルト・ポッターリ大司教から、ローマ教皇ベネディクト16世の指令書が朗読され、1) 宣教の大切さ、2) 信徒も新司教に従順であるように、3) この典礼で司教団に加えられること、が宣言された。松浦五郎司教は新司教に期待する、また大分、広島でも司教が任命されることを述べられた。前任の溝部脩司教、また他の司教を代表して野村純一司教がお祝いをおのべ、日本の福音宣教と一緒にいたい旨、挨拶があった。池長大司教は按手と叙階の祈り、塗油を行い、福音書、指輪、ミトラ（司教帽）、バクルス（牧杖）の授与が行われ、荘厳な雰囲気の中、諏訪司教は司教座に着かれました。諏訪司教は挨拶の中で、ベネディクト教皇が列福式でヨハネパウロ2世は聖性の岩であり続けたと言われた。私は高松教区の岩であり続けたい、主の希望であり続けたい、一致と再生を目標とすると宣言されました。

諏訪新司教は幼少期を我ら六甲教会で生まれ、東京でカトリック神学院を卒業後、叙階前の奉仕職として小林聖心女子学院で2年間教鞭をとられ、29歳で大阪教区司祭となりました。園田、香里、夙川で司牧、高槻、住吉で主任司祭、阪神大震災の時は神戸中央教会カトリック社会活動センター長として奉仕活動を指導、以降神戸東ブロック共同宣教司牧チーム長として、中央、住吉、六甲教会の司祭信徒と

一緒に活動されました。

参加者は新司教を心から祝うと同時に、宣教活動に力を入れたいと誓ったところです。今回の小旅行は川越さん親子に大変お世話になりました。

なお 参加出来なかった方は、インターネットで、諏訪司教叙階式で検索の上、ご覧ください。

(折川)



## 5月28日 宣教を考える集い

### 『神と向き合うことによって生まれる活動を』に参加して

1975年、第2ヴァチカン公会議が始まって10年経ち、混乱するカトリック教会を案じられた時の教皇パウロ6世は使徒的勧告『福音宣教』を発表し、福音宣教の出発点を話されました。聖霊によってイエス様と出会い、聖霊の力を借りて私達が受けたすばらしい言葉を喜びをもって伝えずにはいけない、”その聖霊”が降って下さる事が宣教の原点だということです。福音を伝えていく為に私達はイエス様と出会って聖霊を受け、神様から愛されている喜びと力に満たされた福音宣教者、神様に全てを委ねた心安らかな福音宣教者にならないといけないという事です。どうすれば福音宣教者になれるか、なれなくても近付けるかというのがこの集いの目的とすることのようでした。その為には祈ること、祈って神様に近付き、神様から力、即ち聖霊をいただきそれに喜んで応えるということなのですが、洗礼を授かって半世紀、神様を追い求めながらも主に向き合っただけで祈ることが私にはとても難しく素直な気持ちで祈ることが出来ずにいました。講義を受け、祈りのガイドをしていただき、その後、一人一人がBGMとして流されているグレゴリオ聖歌、イエス様のイコン、そしてザビエルハウスの庭で天に向かってスクスクと伸びる若枝等の力を借りながら静かな安らかな祈りの時間を過ごせました。心から気持ちよく素直に祈れるのにはまだまだ時間がかかるでしょうし、良き福音宣教者になるのは程遠いことです。祈ることの大切さを知り自分の生活の一部にすることが出来るようにしたいと思いました。約40人の方々とご一緒した集いでしたが片柳神父様の解かり易い講義と祈りの指導、実践、締め括りのミサとあつという間に6時間が経ち、静かな安らぎを感じた土曜の1日でした。(折川)

## 典礼奉仕者の集い

6月18日に開催された典礼奉仕者の集いに参加しました。「生活の中でミサを生きる」というテーマで片柳神父に1時間ほどお話頂き、その後5~6名ずつ4つのグループにわかれ、約45分間このテーマについて分かち合いを行いました。

「生活の中で神を見出すにはどうしたらいいだろうか」、「犠牲」という言葉には、自分を押し殺しながら行動しているというイメージがあるが、そうではなく自分の中から溢れ出てくる奉仕の心に従って行動する方がいいのではないかと、「ミサには1週間の生活を神に捧げるという意味もあるが、これから1週間を始めるために神からお恵みやお力を頂くという意味もあると思う」など、いろいろな意見を聞くことができ、有意義な時間を持つことができました。(ラファエル 千原)



## 各部だより

### 📖 壮年会

「みんな」で楽もう教会親睦バーベキュー

・ 7月24日(日) 10時ミサ後、教会駐車場

※現在、大型バーベキューセット(ドラム缶大)が

1台しかありません。貸していただける方は、

壮年会 井川 (078-452-7977) までご連絡下さい。

### 📖 教会学校

・ 7月9日(土) 教会学校終業式

教会学校ローダー研修会

・ 7月23日(土) 教会学校キャンプ準備会

### 📖 宣教部

・ 7月30日(土) 10時 宣教部会

### 📖 典礼部

・ 7月16日(土) 10時 典礼部会

### 📖 地区会

・ 7月17日(日) 11時30分 地区役員会



## 《 お知らせ 》

### ★社会活動部より★

7月 6日(水) 10時

♪手芸の集い 第1・2会議室 どなたでも参加ご自由です。

9日(土) 10時

♪炊き出し 小野浜グラウンドにて、配食やおじさんたちとの  
お話し相手だけでもOKです。

17日(日) ミサ後

♪ミニバザー (イグナチオホール) お弁当・手作り品等の販売

21日(木) 14時

♪ベタニアの集い (イグナチオホール) 聖体拝領式&茶話会  
奇数月第3木曜日

22日(金) ミサ後

♪ともしび ケーキづくり お台所

### ★ 六甲教会で活動するボランティア・グループのご紹介「アンチラドミニ」

活動開始はずいぶん以前になります。グループの名称「アンチラドミニ」は、ラテン語で「主のはため」という意味です。マリアンホーム(広岡洋子代表、かけこみ寺)他を支援するため、フルーツケーキを焼き、教会、カトリック系学校のバザーに出店販売しています。

ケーキ作りは、グループメンバーが教会のお台所に集まって行っています。

(お問い合わせは社会活動部まで)

#### ■船員司牧セミナーについて

7月9日(土) 10:00~16:00

神戸中央教会とメリケンパーク海洋博物館にて

内容は、船員司牧について、博物館見学もあります。

多数のご参加お待ちしております。

今年になって、私のお世話になった神父さんが相次いで他界された。母校の大学カトリック研究会の顧問のお二人、ネラン神父とルーメル神父。学連(東京カトリック学生連盟)時代に指導いただいた粕谷甲一神父。母校の恩師であると同時に、同じ職場(六甲学院)で働いたこともある兵頭逸郎神父と吉川洗神父だ。そのうちから大学生時代にお会いした3人の神父さまの本を紹介したい。

**「おバカさんの自叙伝半分 ―聖書片手に日本40年間― 」 ジョルジュ・ネラン著 講談社文庫**

この3人の中では接触の機会がもっとも少なかったネラン神父の印象は強烈なものであった。私の大学入学とほぼ同時に顧問を辞められたので、直接に話できたのはその数年後に、それも数回出逢っただけなのに。フランス訛りの日本語を駆使し、眼光鋭く、しかし温かく学生達に論理的に挑む師の迫力はすごいものであった。「復活」についてのやり取りの中で、私の眼を覗き込みながら、「君はそう思わないか？」と問いながら迫ってきた時の、その迫力をそのまま文章の中に再現しているのがこの本だ。遠藤周作との付き合いも長く深く、さらりと流す文章は自分で書かれたものに違いなからう。熱を帯びて語る彼の言葉のひびきと切れ味を、話し言葉の持つ親しみと自信に満ちた勢いが文体の中にそのまま持ちこまれている。軍人で、宣教師で、東京大学などの教師で、キリスト教研究書「ロゴス(紀伊国屋書店)」シリーズを監修し、「キリスト論(創文社)」「キリストの復活(新教出版)」を著す神学者で、新宿の酒場エポペを切り盛りしたバーテンで、しかも正真正銘の神父なのだ。この文庫本の中で、読者は神父の明るい声と、こころ篤い生き方、日本にまで宣教にやってこさせた、深い、そして強い信仰に出会うことができるだろう。

**「カトリック信仰を生きる」 クラウス・ルーメル著 聖母文庫**

ルーメル師には、バリケードのすぐ脇のカト研の部室(ガタピシのプレハブ)で週一回、ラッチンガ二(なんと!)を講読していただいた。夕闇の中で私たちと分かれて上智大学へ帰られると、経営者の顔に戻られる?(すぐ後に理事長になられた)という不思議なお立場であった。ある溪谷で行われた学生の合宿に付き添っていただいたときには、夜更かしと二日酔いでぼんやりしている私たちの頭の中に、さわやかなフルートの音色を響かせて、朝のすがすがしい気持ちへと、風を送り込んで下さったのだ。師の専門(西洋教育史)やモンテッソーリ教育についての多くの本を著されているが、ここに紹介する本は、雑誌「聖母の騎士」に連載した記事をまとめたもので、「伝統的な」カトリックの信仰を、74年間日本で過ごされ働かれた神父さんが、優しくコンパクトに語っておられます。日々の祈り・人は神となる・奇跡について・十字架上での言葉・ノベナの祈りの由来・教会の歴史……

蟻の町での司牧の後、日本カトリック学生連盟の指導をされておられた粕谷甲一神父との出会いは、**ユニバーサル文庫**の「**孤独を超えて**」を通してであったが、真生会館で直接にお会いするカスシン(学生達はこう呼んでいた)は、生きいきとして強く高い理想に燃える神父さんであった。にこやかな笑顔で「それは少しおかしいですよ」と私たち学生を度々たしなめられたりもした。学連をハマシン(浜尾神父=後に枢機卿)に引き継がれて、ご自身は青年海外教育隊・国際救援センターへと、フィリピン・ベトナム難民のお世話など東南アジアを中心に、社会奉仕活動へと活躍の場を確保されて行った。愛の実践と行動の人・カスシンは多くの本を残している。そして、そのどれも神の恵みへの絶えざる賛美と感謝が表われています。

★「**出会い**」と「**ふれあい**」花の香りの記録 粕谷甲一著 講談社現代新書

★「**ゆれ動く日本人の心と宗教** 大江健三郎とキリスト教・そしてオーム真理教」

粕谷甲一著 新世社

★「**深き淵より新しき歌を** 九・十一の傷痕を越えて」 粕谷甲一著 サンパウロ など

(飯塚)

## 「東日本大震災義援金募金チャリティーコンサート」を終えて

オルガンチーム 馬場

6月26日(日)午後は蒸し暑く何人に来て頂けるか聊か心配をしていたが、開演時間13時30分前から三々五々来場者があり、普段見かけぬ方々の姿もあり定刻前に200名を超していた。

コンサートは静かなオルガン演奏で始まり、続いて松村主任司祭のキリストの聖体の日に開催される事に成った講話から聖堂で行われるコンサートのムードが醸成されて、いよいよ聖体を讃美する聖歌の独唱でコンサートは始まった。次に行われたオルガン演奏はパイプオルガンならではの華麗で重厚な響きを聖堂内に轟かせた。第一部の最後に女声コーラスに依るミサ曲とマリアに捧げる賛歌に全員が魅了されました。

第二部は木管五重奏の晴れやかでリズムカルな楽曲で始まり、女声コーラスのグレゴリオ聖歌の荘重さはカトリック教会なればこそその感を与えた。最後に木管五重奏との出演者全員に依る大合唱は聖堂に喜びが満ち溢れ、音楽会特有の興奮に浸る事が出来ました。

今回の義援金は多くの方々のご厚志の賜物であり、全金額カリタスジャパンを通じて東日本大震災被災地に寄付します。



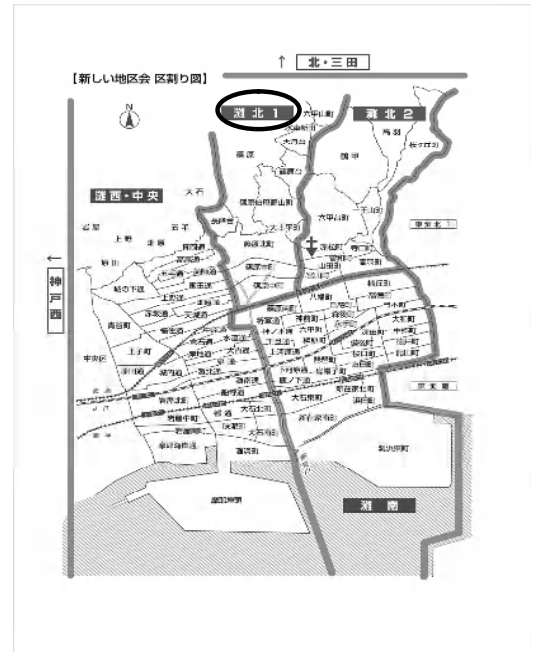
# ～地区会便り～

## ● 灘北1地区 (灘北1地区長 訖)

灘北1地区は教会と道路をはさんで西側、都賀川から東、南は阪急神戸線までの区域になります。域内の信徒世帯数は120程です。比較的狭い地区で信徒の密度は濃いところです。教会に近いという地の利があり、そのぶん機動性が期待されます。

新地区会がスタートしてすぐの4月15日、教会清掃当番が廻ってきました。連絡網が未完成で連絡もままならぬにもかかわらず、大勢の皆さんが早くから集まり、手早く掃除をすることが出来ました。10時には四旬節金曜日のミサが控えていましたが、とどこおりなく始まりました。見事なものだと感心しました。

地区会は教会のイベントを支える核となりますが、地区会の中のコミュニケーションを強め、お互いに支え合う意識を盛り上げて行かなければならないと思っています。地区内には特別養護老人ホームにお住まいの方、一人暮らしのお年寄りの方、介護に明け暮れている方、又それぞれの理由で、教会から遠ざかっている方がかなりの数いらっしゃいます。連絡網に無縁な人々がどうしても出て来ます。それをどのようにフォローするかが難しい課題です。地区会の活動が教会に対して機能的になり有機的に働いたとしてももっと大切なのは、地区会の底でうずくまる「ひつじ」をその人たちの目線に立って一緒に歩んで行く。このことが私たちに与えられたミッションではないかと思っています。



### 広報部員のつぶやき

5月末から6月は、教会の外で多くのイベントや式典があった。5月29日(日)には2年ぶりに「東ブロック合同堅信式」、6月に入ると、5日(日)に「神戸地区大会」が神戸海星女子学院で行われ、わが教会の川合さんが実行委員長として采配を振られ、成功裡に終わった。日頃、あまり他の小教区と接する機会がないだけに、このような神戸地区の小教区あげてのイベントも大切だなと思った。また19日(日)に六甲教会ともゆかりのある諏訪神父様の「高松教区司教叙階式」が高松教会で行われ、教会からも40名弱の人たちが参列した。私自身も司教の叙階式に参列するのは初めてで、荘厳な式典に感動を覚えた。

教会内では、12日(日)に「小教区評議会年次報告会」、26日(日)に「東日本大震災チャリティコンサート」が催され、本当に忙しい月であったけれど、これからはイベントだけに忙殺されず、地区会をベースにした小教区のあり方を静かに考える時間も必要ではないだろうか。(T.H)

教会報8月号の発行は、7月31日(日)です。  
編集会議は7月24日(日)です。  
記事原稿は、7月17日(日)正午までに信徒会館  
受付へご提出願います。(広報部)

<http://www.rokko-catholic.jp>

カ ト リ ッ ク 六 甲 教 会  
〒657-0061 神戸市灘区赤松町 3-1-21  
電 話 078-851-2846  
F A X 078-851-9023  
発行責任者 松村信也 神父  
編 集 広 報 部